

ふるさと吉富町

私たちが暮らす「吉富町」には、現在に至るまでの数々の歴史があります。そして、そこには現在の快適な生活のベースがあります。そんなふるさと吉富町について、いろいろな視点からご紹介していきます。



桜満開の小学校

第24回 ただ さ や 朝日直射す学び舎に… —吉富小学校の歴史—

わが町唯一の小学校

桜舞う春がやってきました。進学や就職など、人生の節目を迎えた方もいらっしゃると思います。そんな数ある節目の中でも、小学校の入学式は、親子ともに最も胸が高まるものではないでしょうか。町で唯一の小学校・吉富小学校でも4月11日に入学式が行われ、ピカピカのランドセルを背負った新一年生達が入学します。今回は、多くの町民や町出身者の母校であるこの吉富小学校の系譜を辿ります。

お寺の本堂から始まった歴史

吉富小学校の原点と言えるのが、明治6年に天仲寺に開校した「金山小学校」です。前年の学制公布により設置されたもので、本堂を校舎として利用し、教員6名、生徒は男子95名・女子8名だったという記録が残っています。校名は、天仲寺の山号「金牛山」から取って付けられました。明治9年には、和井田の野依範治氏宅の酒蔵を借用して「広津小学校」として移転、その後国の制度改正などにより名称が数回変更されたのち、明治26年、現在の場所に「東吉富尋常小学校」の校舎が新築されました。戦時下の昭和16年には「東吉富国民学校」と改称され、校庭では軍事教練や戦没者の葬儀が行われました。昭和19年の卒業アルバムには、国旗に敬礼する様子や遊具で遊ぶ児童の様子が残されています。正門の写真では、坂道や石垣が今もその面影を残していることがよく分かります。

一世紀以上続く伝統

終戦を迎え、昭和22年の新学制の発足に伴い「吉富小学校」となって以降、運動場の拡張や講堂・相撲道場の建築など、あらゆる施設の充実化を行っていきました。その後、昭和60年には校舎が、昭和62年には講堂がそれぞれ建て替えられ、設備についても、全トイレの洋式化やタブレットパソコン90台の導入など、常に先進的な整備を図っています。

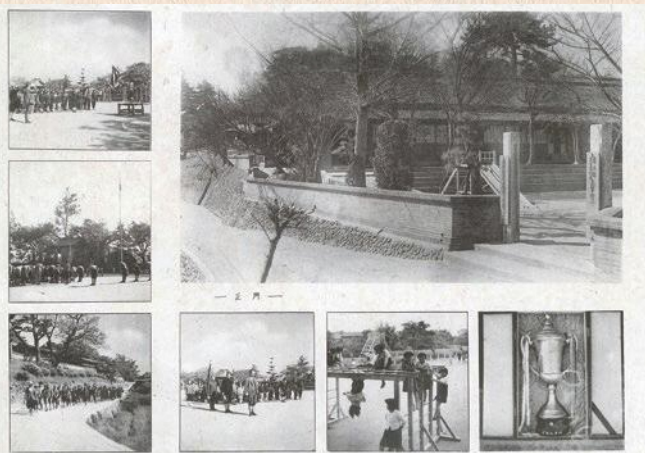
明治・大正・昭和・平成と4つの時代を経て、発展を続ける吉富小学校。明治6年の金山小学校の開校から数えると、今年で創立145周年を迎えます。全国各地では小学校閉校も相次いでおり、閉校後の校舎が違う形で活用されているケースもあるとはいえ、やはり「母校」がなくなるというのは一抹の寂しさを感じると思います。一方、コンパクトな本町では、通学のしやすさや、一町一校ならではの充実した教育施策などから、発展を続けています。吉富小学校は、ますます活気溢れる学び舎として、これからも多くの吉富町民の「母校」であり続けることでしょう。



昔の校舎・講堂
(昭和30年代)



現在の吉富小学校



昭和19年の卒業アルバム